

【書評論文】

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について
——斉藤日出治著『資本主義の暴力』(藤原書店, 2021年)を読む——

岩 永 真 治

はじめに

斉藤日出治氏(以下、敬称を省略)は、経済学を専門にする研究者でありながら、その外延領域を拡張するような仕事をしてきた「社会経済学者」である。別の言い方をすれば、社会学の領域にもっとも近いところで仕事をしてきた経済学者である。今回、斉藤の近著『資本主義の暴力—現代世界の破局を読む—』(藤原書店, 2021年)を書評するにあたって、この点をまず確認しておきたい。すなわち、斉藤の近著を素材とする今回の論文は、社会学、情報社会論、記号論さらには精神分析の議論にまで踏み込んだ経済学の仕事の批評を、フィールドワークを行なう社会学者が「理論実践する」(＝理論的な対象と関わる)という固有性をもっている。

他方、この論文では、「所有－関係行為としての振る舞い」(ヘクシス)における、「意識された行為」(das bewußte Verhalten)と「意識されない行為」(das un-bewußte Verhalten)の関係が問題になっている。それは斉藤・岩永『都市の美学——アーバニズム——』(平凡社, 1996年, p.125)においてマクロ社会学的に提示されたアプローチの、「ミクロ社会学的展開」を意味している。また、この論文は、上に述べたように斉藤日出治著『資本主義の暴力』の書評論文的な性格も併せ持っているが、それは政治経済学的なアプローチによる現代社会分析への、フーコーの「生権力」(bio-pouvoir)論と後期フロイトにお

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten)、あるいは「死の欲動」についてける「死の欲動」(destrudo, Todestrieb) 論の応用を吟味する作業にもなるであろう。

1) 六つの論点

この論文では、著書を要約して評価、コメントするという常識的な書評の手続きはとらない。そうではなく、むしろ本書の主張を構成している主要なまなざしと事実認識を取り上げて、その主張を相対化することを通して、論者との本で展開されている事実や論理との距離化をはかることによって、この本を評価してみようとするものである。

ここでは、六つの論点を取り上げてみたい。1) ホロドモール、2) 死の欲動、3) 無口ゴスのもの、4) 生権力、5) 身体をめぐる制御調整、6) 欲動と道德の問題。それらの論点を論じることを通して、この本で主張されていることの意義とその限界点もみえてくると思うからである。

2) 「ホロドモール」が問いかけるもの

第一に、21世紀の現在、ウクライーナにおける「ホロドモール」(ロシア革命の過程におけるクラーク撲滅運動や人為的な大飢饉創出による大量殺戮)が問いかけるものはなにかという問題がある。なぜ、著書に言及がない「ホロドモール」を問題にするのか。

それは、本書において「現代世界を破局へ導く資本主義の暴力」としての「死の欲動」が主テーマになっているからである。「資本主義の自己崩壊的發展はグローバリゼーションにより極限的な状況にまで達している」というのが、著者の主張であり、現状認識である。「資本主義による社会的殺人」の凄惨さをこの本は鬼気迫る筆致で描き出している。それは、グローバル化の現状のみな

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について
らず、日本社会の歴史分析にまで及んでいる。

一方、社会主義、共産主義思想の実現を掲げた人びとにより文字通り「社会的に殺された人」の数も、かりに反共産主義宣伝によるフレームアップが歴史のなかで一時期大きかったことを差し引いても、非常に多かったことは人口に膾炙している。カンボジアのポルポト政権により殺された人は約170万人と推定されている。中国はもともと人口が多いが、毛沢東は自らの思想実現のために大躍進政策や文化大革命で5,000万人の人を死に至らしめたと言われている。スターリンによるウクライーナにおける人工的大飢饉の創出は400~800万人のウクライーナ人を餓死させた。いわゆる「ホロドモール」である。これはウクライーナ最高議会(ヴェルホフナ・ラーダ)で歴史的事実として認定されている*。齊藤が「資本主義による社会的殺人の凄惨さ」として掲げる本書のなかの

*ウクライーナでは、毎年11月第4土曜日が「ホロドモール犠牲者追悼の日」と定められている。さまざまな追悼行事がウクライーナ全土で開催され、各家庭では午後4時にロウソクに火が灯され、1分間の黙祷が捧げられている。日本では、このウクライーナ人にとっての国民的な犠牲者追悼の「記憶」(記憶は現実の活動(ενέργειες)である)がまったく共有されていない。どうしてであろうか。

「社会的殺人」の数字と比較して、どうであろうか。結論はあきらかである。ロシア革命のなかでロシア人に土地を収奪され殺されたウクライーナ人たちは、本当に殺される必要があったのだろうか。

そしていま再び、2022年2月24日以降、ロシア革命の時と同じやり方で、ウクライーナ人たちがロシア人によって殺され、強制連行され、広大なロシア連邦内に置き去りにされ、また土地や言語や習慣がウクライーナ本土から奪い取られている。

この本の表紙折り返し側に掲載された著者の写真は、脱共産主義法によって

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten)、あるいは「死の欲動」について

2015年以降レーニン像をすべて国土から剥ぎ取ったウクライナ人の国民的な苦悩と悲しみの歴史に向き合っている。それでも斉藤は、「物象的依存の関係を脱した自由人の連合」を、「連帯と協働による諸個人のアソシエーションを組織する」ことによって到達可能にしようと言っている (p.275)。現在のウクライナでは、この思想は、ナチズム同様「ファシズムの思想」と明確に定義されていることをおそらく斉藤は知らない。ウクライナ人たちが歴史のなかでなにと闘ってきたかを現地で知るとき、このような鉄槌と鎌が交錯する旗はとて掲げられない。いまこの旗を掲げているのは、「ドンバス人民共和国」「ルガンスク人民共和国」の占領者たちだけである。そして、かれらを表に出ずに支持しているロシアの保守政党「ロシア共産党」だけである。

3) 「死の欲動」とはなにか

つぎに、「現代世界を破局へ導く資本主義の暴力」としての「死の欲動」とはなにか、またその時代診断は正しいか、その概念の応用は適切か、という問題がある。

都市社会論の文脈で言うと、1924年にアメリカ合衆国で始まった日本人移民の禁止とバージェスの同心円地帯モデルの提示が意味したものは、フォードイズムの確立であった。この大量生産－大量流通－大量消費の社会経済的な好循環の確立は、アメリカ経済の世界支配を揺るぎないものにし、そこにみられる現代の都市生活における物質主義は、第二次世界大戦後に世界の豊かさのモデルにもなった。

1922年成立の社会主義計画経済モデル、1933年からのファシズムにおける総動員経済システムと競合しながら、フォードイズムは世界市場において優位な社会経済モデルになっていった。ドイツや日本の総動員経済システムは1945年の両国の敗戦とともに、その規範は別として制度としては消え去り、他方、社

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について
会主義計画経済モデルは1991年におけるソビエト連邦の瓦解によりその貧困と
抑圧の真実を歴史の表舞台に晒すことになった。

1991年以降は、唯一残ったアメリカモデルの市場経済システムが、グローバル経済の名のもとに世界を席卷している。そのアメリカモデルの資本主義経済システムのグローバルな展開を、齊藤は、資本主義それ自体を破局に向かわせたいという「誤ったロゴスに導かれた欲動」(エピチュミア)であり、その意味で「それ自体で救いのないロゴス衝動」すなわち「死の欲動」である、とみるのである。

齊藤は、このアメリカモデルの市場経済システムの転換点として、最近よく言及されるようになった1970年代末における新自由主義思想の出現を、ミシェル・フーコー『生政治の誕生』の分析を基礎に「統治性の変容」、すなわち「国家理性による統治実践ではなく、自由主義的統治術の誕生」として捉えている。レギュレーション・アプローチにおける国家と市民社会の時代的な把握でいえば、「隔域国家から嵌入国家への移行」を表しているが、それを「自由主義的統治術」という「身体論的表象」で把握しようとしている。ここに、この著書のもっともオリジナルな部分がある。それはもはや「社会経済学」ですらなく、「身体のエコノミー」という領域を問題にしているようにもみえる。

「市場」は、「グローバルな秩序を構成する権力」に、「身体的なレベル」においてなったのである。フォーディズムにおいて作動する「規律訓練能力」(パノプティコン)は、「市民社会の経済的理性にもとづいて作動する権力」になった。齊藤は、近代国家における市民社会の自律性を、国民国家と市民社会が相互に浸透する過程で、また人口移動による都市化と大都市圏の形成、さらには「世界都市」(global city)の形成過程において頭をもたげてきた、「国家のクライアントとしての自己意識を担わされた都市住民」の「身体的な諸実践」として把握したいようにみえる。論理としては、その「身体的実践」が「死の欲動」となって現れていると主張している。

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten)、あるいは「死の欲動」について

ところで、「死の欲動」は、よく知られているように、後期フロイトの精神分析上の用語である。フロイトは、『集団心理学と自我分析』(1921年)のなかで、ル・ボンの「集団心理」に関する説明に触れながらこの語に関連して、つぎのように自身の立場を述べている。

まず、ル・ボンは、「……集団の中にいる個人は、自分たちがただ多数であるということによって、自分たちには他の人々が抑えることができないような力が与えられたとを感じるものであり、一人だった時には制御しなければならなかった欲動に、身を委ねるようになるのである。集団の中にいると、個人の名前が特定されず、責任を負わされることがないために、普段であれば個人を制約するような責任感がまったく失われてしまうのである。そのために欲動が制御される機会がますます少なくなる……」*と述べている。

それに対して、フロイトは、「個人が集団に入ることによって、自分のもつ無意識的な欲動の動きを制御するものを捨て去ることができるようになると指摘するだけで十分」であり、それは「実際にはその個人のうちにあった無意識的なものが表現されただけにすぎない」と述べている。そして、この「無意識的なもの」(das Unbewußte)のうちにこそ、「人間の精神に潜むあらゆる悪の素質が現れている」と述べている**。このような状況にあっては「良心や責任感のようなものが姿を消してしまう」のであり、「良心の核心にあるのは〈社会的な不安〉である」と指摘している***。

*フロイト (2021), pp.177-78。

**同上, p.178。

***同上。

ここに示されているのが、フロイトが言う「集団心理の第一の要因」である「無意識の欲動」である。

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について

4) 「ロゴスのなもの」と「無ロゴスのなもの」

他方、齊藤が指摘するのは、「誤ったロゴスに導かれた欲動」であり、「それ自体で救いのないロゴス衝動」である。これはあきらかに「ロゴスのなもの」を示している。問題は、齊藤が語る「ロゴスのなもの」がなにを意味するのかである。また、フロイトが言う「無意識の欲動」はそれ自体、「ロゴスのなもの」なのか、「前ロゴスの、あるいは無ロゴスのなもの」なのか、ということにある。

小林敏明は、ライプツィヒ大学における講義記録を纏めた著書『フロイト講義「死の欲動」を読む』(せりか書房、2012年)のなかで、通常日本語で無造作に「無意識」と訳されるドイツ語形容詞unbewußtの名詞形das Unbewußteを、un-というドイツ語の否定接頭辞の本来の意味に着目して、注意深く「意識されないもの」(または「無意識的なもの」)と訳している。この「意識されないもの」はそれ自体、依然として「ロゴスのなもの」なのか、あるいは「無ロゴスのなもの」なのか、あるいは「前ロゴスのなもの」なのかが、ここで問題になってくる。

「ロゴス」は通常、「言語」あるいは「言語秩序」として理解されている。この意味において、「学問的な知識・科学的な知識」(エピステーメー)は、あきらかに「ロゴスのなもの」である。しかし、われわれの社会的行動は「言語」や「言語的秩序」によってのみ動かされているわけではない。アリストテレスが『ニコマコス倫理学』第7巻第2章で指摘しているように、人間には「学問的な知識・科学的な知識」(エピステーメー)のみ(すなわち、「無知の知」の解消)では制御できない行動が存在している。ここで問題になってくるのが、「ヘクシス・カタ・トン・オルトン・ロゴン」(カント的な定言命題やヒュームの功利主義命題)に対して「ヘクシス・メタ・トゥ・オルトゥー・ロゲー」という、身体的な運動に秩序づけられた「意識されない」社会行動である。前者は「ロゴスに従った振る舞い」、後者は「ロゴスをともなった振る舞い」と

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten)、あるいは「死の欲動」について
訳することができるであろう。さらに、前者は定言命題や功利主義思想のように
言語的な秩序に裏打ちされた行動原理としても理解することができる。一方、
後者は、非言語的で意識されない「身体運動の論理的な秩序」を表現している。

さらに、この点をめぐっては、フロイト自身がカントの「定言命題」と彼自
身の「超自我の機能(とその強制的な性格)」を同一視していることが興味を
そそる*。フランスの精神分析家ジャック・ラカン、精神分析における自らの

*Sigmund Freud, *Das Ich und das Es* (1923), in *Gesammelt Werke*, Bd. a.a.O., S. 263.
(「自我とエス」道簇泰三訳、『フロイト全集』第18巻)

理論的作業の深化の過程で、父に関するフロイトの諸論の限界を明示的に示す
ようになった。ラカンが超自我と結びつけるのは、「想像的な父」(père
imaginaire)という独自の概念である。この概念はラカンの研究史において、『対
象関係』のセミナー以来、「剥奪」(privation)の契機と結びつけられてい
るものである。「想像的な父」は、なによりも「享樂を剥奪し、それを独占す
る父」として捉え返されている。この「剥奪」という経験は、工藤顕太によれ
ば、「ひとえに言語をつうじた意味づけに由来」しており、そこでは「ペニスの
有無という生物学的性差」とは異なる次元の「象徴的性差」が問題になって
いる*。

すなわち、日常における「現実界 (le réel)」「想像界 (l'imaginaire)」「象徴
界 (le symbolique)」の関係の問題がここで浮上してくる。それは、日常生活
者にとってのリアリティ (l'actuel) すなわち「実践感覚 (le sens pratique)」
とはなにかという問題を提起している。

*この解釈に関しては、工藤顕太(2021)『精神分析の再発明—フロイトの神話、ラカ
ンの闘争—』、とくにI「フロイト的無意識からラカンの無意識へ」の、第2章5「超

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について自我をめぐる新たな問い」における解釈を参照。

一方、齊藤が問題にしているのは、前者すなわち「定言命題」(＝言語的秩序)の機能の問題であり「超自我」の強制力の問題であるが、フロイト→ラカン研究で炙り出されて来ているのは、後者(＝非言語的で意識されない秩序)の問題であるように見える。あるいは、「無意識、前意識における欲動の世界」(古典ギリシア語では、エピチュミア)であるかもしれない。ここには、「制御調整された身体」(regulated body)と「制御調整されない身体」(unregulated body)の間にある、「身体をめぐる軋轢、葛藤、内的矛盾、解放」(bodily hexis, 身体的性向)の問題が隠されている。そこには、齊藤の視野には十分に入ってこない「身体と社会」の問題が伏在している。この「身体と社会」の問題は、齊藤がその博士論文以来探究してきた「言語と記号と象徴の秩序における物象化論的地平」からは抜け落ちていた問題であり、「資本主義の暴力としての死の欲動」の最前線においてその具体相が把握されなければならない問題であろう。それは齊藤が他の論考で論じている「空間的身体」の問題以上の問題である*。

*齊藤日出治(2019)「空間的身体の発見—コンメンタール『空間の生産』—」(『近畿大学日本文化研究所紀要』第2号所収)を参照。

それは「身体の具体的な運動秩序」(physical hexis)の問題であると同時に、それに関連した「精神の習慣的に社会構造化された秩序」(psychological hexis: ethical & moral hexis and intellectual hexis)の問題である。「身体のリズム」は、「肉体的な身体のリズム」であるだけではない。「精神的、文化的、経済的あるいは政治的なリズム」でもある。そのように交錯するリズム問題を、私はここで、「身体の社会的性向」(bodily social hexis)の問題と呼んでみたい。

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten)、あるいは「死の欲動」について

それは、かつてドイツの哲学者シェリングが『超越論的観念論の体系』(System des transzendentalen Idealismus, 1800)において「無意識的なもの」と言い当てたもの、すなわち「自由に動く無形の欲動(Trieb)」を含んでおり、シェリングによればそれは「知的直観」(intellektuelle Anschauung)によってのみ把握されるもので、アリストテレスが言う「直観知」(ヌース, νοῦς, intuitive understanding)にも近い。

斉藤の論理では、近代においてバラバラになった都市に生きる諸個人は、スペクタクルなどにみられるように記号と象徴のレベルで再統合されなければならない。だが、M.マフェゾリが指摘するように、「想像的なもの」(l'imaginaire, the imaginary)によって再統合されたその諸個人は、実際には「都市の諸部族」(urban tribes)のモザイクを形成せざるを得ない。「ノマドを生きる」か、「都市の部族に所属する」か、しなければならないのである。しかし、その場合、身体はどこに残るのか。身体における「知的直観」は、どこに残るのか。

他方、近代を生きるのは「都市民」だけではない。農村、漁村、中山間地域、島嶼地域においても、人びとは「それぞれの近代」を生きている。厳格な自然に向き合いながら近代生活を送っているこれらの人たちは、彼らを取り囲む自然を向こうにおいてスペクタクルによって、すなわち「想像的なもの」によって再統合されているだろうか。ときにそうであるが、いつもそうではない。彼らにとっては「自然現象それ自体がスペクタクル」である。

問題は、彼らが人口的な少数派であることである。しかし、「移動」(モビリティ, mobility, mobile life)の時代に彼らもまた、ICT技術の利用を通して「関係人口」として自らを「全人口的に主体化」しつつある。そして「知的直観」は、彼らの生活実践において日常的なものである。「関係人口」化されつつあるその「知的直観」は、実際どのように社会内において作用しているのであろうか。こうした問いも、きわめて「現代的な問い」になっている。

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について

5) ミシェル・フーコーの「生権力(bio-pouvoir)論」との関係

齊藤の著書のもう一つの特長は、レギュラシオン・アプローチにおける「総過程的媒介としての政治、すなわち市民社会」の機能を、人口や医療技術を媒介とした国民国家による市民社会への生権力的な介入にみている点である。これは非常に斬新な視点であり、つぎのフーコーによる「生権力」の定義は、たしかに齊藤の「市民社会」の定義とも合致している。フーコーは、つぎのように言っている。「『生権力』(bio-pouvoir)……。社会そのものから出発する……。国家とかかわりをもちつつおこなわれる社会の自己統治の手法である。それはいわば社会が自己調整するような『振舞い方』」((2008)(慎改康之訳)『生政治の誕生』,p.392)である。フーコーは、「統治」(gouvernement)を「政府」として定義するのではなく、「一つの枠組みのなかで国家の諸々の道具を用いることによって人間の行いを統御しようとする活動」(同前)と捉える。そして、われわれが日常使用している「社会」という観念が、この「統治術」とともに生まれたことを指摘する。すなわち、「社会という観念、これこそが、一つの統治テクノロジーの発達を……可能にするのである」(同前, p.393)と。

フーコー的な観点から言い換えれば、市民社会とは、市場経済の発展とともに自動的に出現する社会ではなく、生権力による人口・住民の統治術によって歴史的に構築されていく社会化の過程なのである。齊藤は、晩年の平田清明が「総過程的媒介としての政治」によって構成された社会として定義した「市民社会」、この社会を、フーコー的な観点から生権力による「統治術」(古代ギリシア時代の用語に立ち戻れば、「ヘクシスとしての政治術」、すなわち「社会的な調整主体としての身体技法＝振る舞い」(das bewußte und unbewußte Verhalten) —岩永)によって構成された社会として暴きだしたのである。しかし、身体レベルで意識されない(言葉にならない)論理的秩序をどう説明するのか。この問題が残っている。

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten)、あるいは「死の欲動」について

「身体の比較社会学」的観点から言えば、ここには「ハビトゥス」の「デフォルト概念としてのヘクシス」を応用した、日本における形態(=様相)分析の問題が残存している。

6) フォーディズムのレギュレーション分析は、本来どのレベルで有効性を持つのか

レギュレーション・アプローチが「制御調整」(régulation)の概念を現代資本主義、とりわけ第二次大戦後のフォーディズム(1950~70年代前半)の蓄積体制の解明に導入したのは、この蓄積体制の編成を媒介する市民社会の独自の権力作用に着目したためである、と斉藤は述べている(pp.137~138)。現在、この独自の権力作用の身体レベルにおける日本的、フランス的あるいはアメリカ的表現とはどのようなものか? すなわち、「制御調整された身体」(regulated body)と「制御調整されない身体」(unregulated body)の間にある軋轢、葛藤、内的矛盾、解放の比較文化論的な位相はどのように表現されているのか?

「現代資本主義における死の欲動」論の一般論的な議論に終始しているこの著書からは、残念ながら、その具体相はまったく見えてこない。それは、「蓄積体制」(régime d'accumulation)を支える「制御調整様式」(mode de régulation)の身体的な基盤を論ずるための幅広い人間論が、この著書では十分に展開されていないからである。

7) 欲動と道德の身体的問題をめぐって—社会学的概念は経済学の残余カテゴリーではない

ところで、斉藤にとっての「死の欲動」をめぐる人間論は、つぎのようなフ

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」についてフロイトの説明の援用である。「人間には生まれつき『悪』への性向,攻撃と破壊に向かう,それゆえまた残酷性にむかう性向が備わっている」(フロイト(2011)(嶺秀樹・高田珠樹訳)「文化の中の居心地悪さ」,p.132,齊藤,pp.237~38)。そして,「欲動」(Trieb/pulsion)とは,「より以前の状態を再興しようとする,生命ある有機体に内属する衝迫」である(フロイト,同前,p.90。本文にある強調は削除した)。

このフロイトの人間観をもとに,つぎのように齊藤は述べている。「……生を活性化し生をたえず更新しようとする〈生の欲動〉に対して,生以前の状態に,つまり無機物に回帰しようとするもうひとつ別の欲動を発見する。/そして,この生以前の状態に立ち戻ろうとする〈死の欲動〉が〈生の欲動〉のなかに入りこむとき,それは他者や外部に対する攻撃的欲動となって発現することになる。無機物に帰ろうとする,自己の内部からわき起こってくるこの〈死の欲動〉が,〈生の欲動〉の回路をとおして,他者や外部に対する攻撃的欲動へと転ずるのである。」

フロイトが言う「反復強迫」を生み出しているものは,ここでは「肛門性愛」と「貨幣欲望」である。その根底にフロイトは,「死の欲動」という「無意識」を読み取る。ノーマン・ブラウンによるフロイト解釈を梃子に,齊藤はつぎのような現代市民社会の自己了解へと到達する。

「貨幣をかぎりなく増やすことに生のすべてを注ぐ生き方は,生命活動が肉体から排泄物へと転換されることを意味する。肉体から放出された排泄物が生命力を得て自己運動するように,肉体から排出された貨幣が生命力を得て自己運動を遂げる。この不朽の生命を求める運動は,生命活動が無機物に解消し,〈生の欲動〉を〈死の欲動〉へと還元する。無機物たる貨幣の自己増殖に生の永遠性を求める欲動は,快原理(Lustprinzip)にもとづく生の充足をたえず先送りし迂回させる。この生の先送りと迂回をとおして,〈死の欲動〉が増殖

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten)、あるいは「死の欲動」についてしそれが破壊的な攻撃へと転ずるのである。」(齊藤, p.248)

こう論じた後に、齊藤は、スウィフト『ガリバー旅行記』第4篇「フウイヌム王国渡航記」に言及する。ここで「人間本性」は、ヤフーという動物に仮託して語られている。

「ヤフーの性向」(齊藤, 前掲, p.252)とは、排泄物への執着、死に対する恐怖と死の回避の願望、金銭への執着、たがいの敵対関係の増幅、である。それを齊藤は、〈死の欲動〉にとりつかれた〈生の欲動〉であるという。「死を回避し排泄物のうちに不滅の生命力を託そうとするこの願望が、〈死の欲動〉に支配された〈生の欲動〉という抑圧神経症を生み出すのである。」(同前)そしてこの理解を、「貨幣欲望には、無機物へと回帰しようとする〈死の欲動〉が内包されている」というケインズの貨幣認識(=貨幣欲望批判)に、齊藤は結びつけている。

問題は、この「ヤフーの性向」(yahoo as a bodily hexis or bodily disposition)が現代日本において「普遍的な身体モデル」になっているかどうか、である。人間本性一般の議論に戻れば、それは「エレウテリオテース」(気前のよさ, ἐλευθεριότης, generosity or liberality which seems to be the observance of the mean in relation to wealth)や「メガロプレペイア」(お金に関する度量の大きさ, μεγαλοπρέπεια, magnificence or munificence of a magnificent kind which means spending of money on a grand scale from the motive of public spirit)など、「倫理的卓越性」(=性格の徳)の問題ではないのか。近年の徳倫理学(virtue ethics philosophy)の影響の拡大になぞらえて言えば、そう相対化もできるのではないか(マーサ・ヌスバウム「相対的ではない徳—アリストテレス的アプローチ」などを参照)。

さらに、「全体の欲動」に対する「部分欲動」の問題も残されている。精神分析学的に「バラバラの身体」「身体の断片化したイメージ」を人間理解の中

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について

心に据えと、フロイトが言う「部分欲動」の問題に行き当たる。人間の欲動は、ひとりの人間の身体・意識・無意識の「全体の欲動」ではなく、身体「ある部分の欲動」であるという考え方である。ジャック・ラカンは、「乳房、糞便、凝視、声」を「部分対象」として、この「部分対象」のそれぞれが「口唇、肛門、眼、耳」といった「部分欲動」の場である「性感帯」に対応するとしている。この「部分欲動」の問題に斉藤は十分に踏み込めていない。斉藤が言う「死の欲動」は、つねに「全体の欲動」であるように見える(ラカンの「部分欲動」論の解説としては、宇波彰(2017)『ラカンの思考』作品社、pp.54-63を参照)。

ラカンの「部分対象-部分欲望」論と比較すると、斉藤は「部分対象」とされているもののうち「糞便」にとくに注目していることが分かる。斉藤によれば、「糞便」は「金銭、贈り物、子ども、ペニス、武器、といったものと結びついた多義的な象徴性」を帯びている。大腸をくぐってでてくる棒状の糞便はペニスと同一視され、糞便に対する関心が贈り物に対する関心へと移り、最終的には金銭に対する関心へと移行する。排泄物に対する赤ん坊のこの性癖が、大人になると「吝嗇、節欲、強情」といった「人間の性格」になって昇華され、この昇華された性格を通して、幼児期における性癖に潜んでいた人間の「無意識の欲動」が保持されるのである(斉藤、前掲、p.244)。

こうして、肛門性愛論(フロイト)と貨幣欲望論(ケインズ)が斉藤のなかで結びついてくる。しかし、この議論は、「部分欲動」論の一部を「全体の欲動」論にすり替えてしまっていないだろうか。

いずれにせよ、ここには、経済学一般が歴史的に社会行動に関する社会学的あるいは精神分析学的な研究対象を「残余カテゴリー」としてきた余韻が認められる。それは「消費者としての買い物客」(shopper as a consumer)の意思決定が、「市場価格」(market price)や「流行の振れ=移り変わり」(swings of fashion)によって説明しようと過信しているマーケティングや経済理論の状況に依然として似ている。それらのカテゴリーは「文化的に無垢」(culturally

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten)、あるいは「死の欲動」について innocent) であり、「消費者の文化的に首尾一貫した選択=判断」(integrity of consumer's choice) は考慮されていない。社会学のカテゴリーは経済学のカテゴリーの余波のなかにだけあるわけではない、という理解が、ここでは重要になってくる (Douglas, Mary (1997) 'In defense of shopping' における議論を参照)。

むすびにかえて―「実践感覚としての身体性向」(＝振る舞い)の分析に向けて

齊藤によって描写されている「身体の統治術」は、あまりにも受動的であり、ネガティブに能動的である。そこには「現実的な人間の振る舞い」における「能動的な生き方」が上手く把握されていない。文法論的なアナロジーで言えば、古典ギリシア語における「受動相中動態」の世界が上手く捉えられていないとも言えるだろう。われわれの日常的活動は、齊藤が描いているよりもっと主体的である。

「欲望」(人間の文化的な欲求)が「欲求」(人間の自然本性的な欲求)を覆い尽くしたものが「欲動」であるのか。「欲望」(オレクシス)には、「願望」(プーレーシス)や「激情」(チュモス)など、他の有ロゴス的な構成要素は存在しないのか? (岩永, 2023参照) また、「生の欲動」(エロス)に対する「死の欲動」(タナトス)の躍動を、資本主義の自滅的な跳躍としてどのように実証分析するのか?

「社会分析」(social analysis)は、「類推的な説明」(analogy)ではない。自らの死への予感を対象に対する攻撃的な分析によって扇動言説に変えても、それは十分な社会分析にも、人間の「振る舞い」の深い理解にもならない。今後の課題は、グローバル化のなかでフーコーが言う自由主義的統治術の市民社会内(あるいは市民社会としての)実践が、そこそこで日常的にどのように実現しているのか(貫徹しているのか、失敗しているのか、あるいは変容している

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」についてのか),場面を限定して分析していくことであろう。

フーコーが分析するように,いくつかの目標(テロス)へと方向づけられた不断の反省的考察によって自らを調整するような〈振る舞い方〉が,「自由主義」の本質であってみれば,われわれの日常的実践にはどのような生活目標(道徳的目標,世俗的な生活目標,組織における目標,社会的目標など)が実際に存在し,それらへと方向づけられた「不断の反省的考察」によって自らの行動をどのように調整しているのか,厳密に分析される必要があるだろう。

さて,「近代の曲がり角」が議論されている現在,われわれの日常的行動の原理・原則は,「不断の反省的考察」になっているだろうか? なにか別のものによって代わられてはいないだろうか?

参考文献一覧

- ドスタレール, ジル&マリス, ベルナール (2017) (斉藤日出治訳)『資本主義と死の欲動—フロイトとケインズ—』藤原書店。
- Douglas, Mary (1997) 'In defense of shopping,' in Falk, P. & Campbell, C. (ed.), *The Shopping Experience*, Sage.
- エリオット, アンソニー & アーリ, ジョン (2016) (遠藤英樹訳)『モバイル・ライブズ—「移動」が社会を変える—』ミネルヴァ書房。
- フーコー, ミシェル (1981) (中村雄二郎訳)『言語表現の秩序』河出書房新社。
- フーコー, ミシェル (2008) (慎改康之訳)『生政治の誕生—コレージュ・ド・フランス講義1978-1979年度—』筑摩書房。
- フーコー, ミシェル (2006) (小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編)『フーコー・コレクション1~6』ちくま学芸文庫。
- フーコー, ミシェル (2020) (田村俊訳)『監獄の誕生〈新装版〉—監視と処罰—』新潮社。
- フロイト, ジークムント (2006) (須藤訓任訳)「快原理の彼岸」(同訳)「無意識についてひとこと (Etwas vom Unbewußten)」『フロイト全集』第17巻, 岩波書店所収。
- フロイト, ジークムント (2007) (道簾泰三訳)「自我とエス」『フロイト全集』第18巻, 同上所収。
- フロイト, ジークムント (2011) (嶺秀樹・高田珠樹訳)「文化の中の居心地悪さ」『フロイト全集』第20巻, 岩波書店所収。
- フロイト, ジークムント (2021) (中山元訳)『フロイト, 無意識について語る』光文社 (古

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について

典新訳)文庫。

船津衛(2011)『自分とは何か―「自我の社会学」入門―』恒星社厚生閣。

平田清明(1993)『市民社会とレギュレーション』岩波書店。

岩永真治(1998)「アーバニズムの生誕と市民社会の発展―斉藤・岩永共著『都市の美学』における主題と方法―」明治学院大学社会学・社会福祉学会編, Socially, 第6号所収。
岩永真治(2023)「〈振る舞いの社会学〉を素描する―その目標, 基本概念, 実践形態, 研究テーマについて―」明治学院大学『社会学・社会福祉学論叢』第160号所収。

小林敏明(2012)『フロイト講義〈死の欲動〉を読む』せりか書房。

コンクエスト, ロバート(2007)『悲しみの収穫―ウクライナ大飢饉―』恵雅堂出版。

工藤顕太(2021)『精神分析の再発明―フロイトの神話, ラカンの闘争―』岩波書店。

工藤進(1998)『声―記号にとり残されたもの―』白水社。

ラカン, ジャック(1972/77/81)(宮本忠雄, 佐々木孝次ほか訳)『エクリ』弘文堂(「無意識における文字の審級あるいはフロイト以後の理性」「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲望の弁証法」を含む)。

ラカン, ジャック(2005/6)(佐々木孝次, 原和之, 川崎惣一訳)『無意識の形成物(上下)』岩波書店。

ラカン, ジャック(2020)(ジャック=アラン・ミレール編, 小出浩之ほか訳)『精神分析の四概念(上下)』岩波文庫。

ルフェーヴル, アンリ(2000)(斉藤日出治訳)『空間の生産』青木書店。

向井雅明(2018)『ラカン入門』ちくま学芸文庫。

中井和夫(1988)『ソビエト民族政策史―ウクライナ1917-1945―』御茶ノ水書房。

同(1998)『ウクライナ・ナショナリズム―独立のジレンマ―』東京大学出版会。

岡部芳彦(2020)「日本人の目から見たホロドモール」神戸学院大学経済学部Working Paper Series No. 28。

小川万海子(2011)『ウクライナの発見―ポーランド文学・美術の19世紀―』藤原書店。

ヌスバウム, マーサ(2015)「相対的ではない徳―アリストテレス的アプローチ―」加藤尚武・児玉聡編・監訳『徳論理学基本論文集』勁草書房所収。

斉藤日出治・岩永真治(1996)『都市の美学―アーバニズム―』平凡社。

斉藤日出治(1990)『物象化的世界のオルタナティブ―現代資本主義と言語・情報・記号―』昭和堂。

斉藤日出治(1999)『ノマドの時代―国境なき民主主義―』大村書店。

斉藤日出治(2019)「空間的身体の発見―コンメンタール『空間の生産』―」『近畿大学日本文化研究所紀要』第2号所収。

スウィフト, ジョナサン(1980)(平井正穂訳)『ガリバー旅行記』岩波文庫。

田上雄大(2017)「ウクライナにおける言論の自由」『出版研究』48。

「意識されない振る舞い」(das unbewußte Verhalten),あるいは「死の欲動」について

谷川真一(2017)「文化大革命の暴力―何が明らかになり、何が明らかになっていないのか―」『アジア研究』静岡大学,別冊5。

宇波彰(2017)『ラカンの思考』作品社。

謝辞

齊藤日出治先生(大阪産業大学名誉教授)とはじめてお会いしたのは、パリのカルチュラタンのサンミッシェル通りとサンジェルマン大通りが交差する角にあるカフェの2階でした。平凡社「これからの世界史シリーズ」の最終巻『都市の美学』を共同で執筆することになり、堀田泉先生(近畿大学名誉教授)からパリ大学で研究滞在をしていた齊藤先生を紹介されて会いに行ったのが、1993～94年ごろのことだったと思います。『都市の美学』上梓が1996年12月1日となっていますので、それから四半世紀以上が過ぎたことになります。その後齊藤先生は陸続と単著を出版されて、ご自身の研究の成果を世に問われてきました。直近のご著書の書評を依頼され、執筆時点で1年半が経ってしまいました。ご著書に対して適切な文章になっているのかどうか心許ない限りですが、フィールドワークを行なう社会学者としてのポジションから、また私の現在の思想的な立場から、他の書評にはないオリジナルな切り口になったかなと感じております。

この書評をさせていただくことを通じて、あらためて齊藤先生の学術的な到達地点の高さとその知的独創性を認識させられるとともに、私自身、自分のなかに埋もれてしまっていた旧い研究テーマを呼び起こす機会をあたえていただくことにもなりました。その引き金を引くことが、齊藤先生の優しく紳士的な意図だったのかもしれません。いずれにしても、『都市の美学』を準備するときの議論同様、多くのことを学ばせていただきました。ここに記して謝意を表したいと思います。

今年、2023年8月から来年2024年3月まで、サバティカルで4回目のパリにおける研究滞在を私は予定しています。今回はしっかりと、自分の眼で見たパリを、借り物でない自分の言葉で、カフェや路地裏の隅々まで、またヨーロッパ統合のなかで変容する社会構造をしっかりと見据えて語ることができるように、多くの素材、リアリティを持ち帰りたいと思っています。帰国後また、それを前提に、齊藤先生とシチュアシオニストの評価やアンリ・ルフェーヴルの著作に潜むニーチェのテーマなどについて議論できることを楽しみにしています。